

平成 28 年度 第 3 回 高精度測位社会プロジェクト検討会
議事要旨

1. 日時：平成 29 年 3 月 14 日（火） 16：00～17：30

2. 場所：TKP 大手町カンファレンスセンター ホール 22G

3. 議事

- (1) 前回議事録確認及び前回の指摘事項への対応状況報告
- (2) 屋内外シームレス測位サービス実証実験グループ検討状況報告
- (3) 推進体制検討ワーキンググループ検討状況報告
- (4) 関連プロジェクトにおける取組について
- (5) 平成 28 年度の成果・課題とりまとめ及び平成 29 年度以降の取組内容イメージについて

4. 議事要旨

(1) 議事 (1)

資料 2、3 の説明後、出席者より特に発言は無かった。

(2) 議事 (2)

資料 4 の説明後、出席者より以下の発言があった。

<屋内測位環境構築ガイドライン（案）について>

- ・ 素材の収集からアプリの公開という流れは、今後、普及・展開していく時には、ゴールはアプリの公開ではなくて地図の公開になると思う。このガイドラインも、地図やタグの公開のプロセスについて記載が必要になると思う。
- ・ 今年度作った地図やタグもこれから公開されるとすると、その利用手続きとか公開のガイドライン、契約といったものが重要になっていくだろう。そこをガイドライン化していくことが重要ではないかと思うので、今後の作業かもしれないが、タグに関しても機器の設置だけではなく、どう利用させるかについてガイドラインなどの整備が必要かと思う。
- ・ このガイドラインの中で、ビーコンに関する部分を見ると、設置の設計のところ、「こういうところに付けると電波が減衰する」といった物理的な工事の方法がずいぶん書いてある。しかし、それ以前に、何メートルおきにどうするのかという話は、「距離感覚を考慮せよ」と大まかに書いてあるだけだ。こうした事項については、設置設計概要でなんとなくメタなことが、「論理的に設計しなさい、よく考えなさい」とか書いてあるだけなので、今後ここが具体的に書き込めるともっと有用になるのではないか。
- ・ サービス実証グループからも、少し実際に使ってみてどうだったとかそういう報告があがってくると、今の「論理的に設計しなさい」という部分がもう少し具体的になるのかなと思う。

(3) 議事(3)

資料5の説明後、出席者より以下の発言あった。

<災害時の空間データの取り扱い>

- ・ 災害のときに空間データを繋げられるように、今回の取り組みを通じて進めていただきたい。こういう機会にデータが繋げられることがまず大切だと思う。
- ・ 東京の丸の内地区は、日本の中核なので、災害があった際は早く復旧しないといけないと思う。そうすると、そこに居る人たちが、日常のデータからどれくらい来るものか、把握しておく必要があると思う。丸の内地区から八重洲地区までの全ての人流データというものを、公的データも含めて日頃からみるという体制を作っておかなければならないのではないかなと思う。各施設では、一旦収容してから、各ビルの方に向こうに移ってください、という調整をすると思うので、そういうことがやれるような準備も実証実験というフェーズの中で考えていただけるとありがたい。
- ・ あわせて地下埋設とかインフラ関係の配管データも可能であれば電設できるようにしておいて、インフラ会社が復旧するときどこから手をつければ良いかが分かるようになれば良いと思う。その上で、利活用という話になるとさらにいいと思う。

<推進体制を立ち上げる上で考慮すべきプレイヤー>

- ・ 推進体制に欠けているプレイヤーとして、サービスの開発者があるのではないか。この手のことが広まる際、施設管理者が大量におり、サービス事業者は大量にサービスができることを期待する。そのときに「施設×サービス」を個別にやっていたらたまらなくなるので、中間に組織を置きましょうというところに中間組織を作る意義があるという話だと思う。極端に言うと、施設開発者とサービス事業者がノーコミュニケーションで、かつお互いが満足できるのが究極的な目標になると思う。そういう意味で、サービスの開発者を加えると、契約やライセンスといった取り決め事項は、資料に書いていないパターンがもっと挙がってくる気がする。
- ・ 測位環境の中には、データだけでなく、システムというハードウェアが存在し、それをみんなでシェアするときに必要な取り決めが、サービス事業者と施設管理者がお互いに満足できるようなものはどうしていくのかといったあたりの議論が必要かなと思う。

(4) 議事(4)

資料6、資料7、資料8の説明後、出席者より以下の発言があった。

<個人情報の取り扱いへの注意>

- ・ 札幌の事例について、札幌市では、カメラ画像も将来的には使うという話を別の機会に聞いている。国土交通省のガイドラインだけではカバーしきれない部分があるので、個人情報保護委員会で作るガイドライン等もみて規約を作るように指導をさせていただいた。
- ・ 市民に対して説明する内容、サービス事業者に対して約款で説明する内容の詳細化については、事業者と札幌市が協議いただいて定着するようにしていただければと思う。
- ・ 特に、これから人流の話とか動き始めるとそういうところを、かなり気を使わなくてはいけない。逆に言うと、こうしていろいろなところで実証がはじまると、ある種社会的には受容されるという相場観ができて、リスクは減ってくるのではないかな。

<歩行空間ネットワークデータについて>

- ・ こういった作成ツールも含めたネットワークデータをうまく作る環境と今回の検討会で出ているいろんな地図の話とうまく連携して、例えばツールをこういう風に使うと、検討会の地図のこういう部分ができるとか、そういうのはあるのかと思う。また、誰がネットワークデータを作っていくのかに関しては、あまり明確にはこの資料には書いてなかったように思うので、この検討会で出ているところでの実施や、実装の仕組みとの連携・協力が可能性としてあるのか。
- ・ (回答)
- ・ 歩行空間ネットワークデータ等の整備について、当面は自治体による取組を進めており、自治体向けのガイドラインも整備している。
- ・ オープンデータの考え方を踏まえ、公的機関や施設管理者等がデータを支えていくためのプラットフォーム等環境整備について、引き続き取り組んでいきたい。
- ・ (補足)
- ・ 歩行者移動支援の歩行空間ネットワークデータに関しては、まずこのプロジェクトでやったようなベースの地図があり、その上に地物として歩行者移動支援に必要な障害物等の情報を整備いく。さらにそこにビーコン等が付くと、国土地理院のパブリックタグの話になっていくという関係にあると思う。
- ・ 歩行者移動支援の仕様を作るときに、データのもとになる地図というのがもちろん必要。また、逆に地物で歩行者移動の障害物等がいろいろ地図にプロットされてくると、ビーコンを設置する際に障害物等のあるところに置こう、といった動きになってくると思う。

<ビーコンの設置や測量等の作業のインテグレート>

- ・ ベースの地図の作成、ビーコンの設置、歩行者移動支援のための情報収集をバラバラにやるのではなく、例えば、ある自治体でビーコンを設置するなら全て一回でやるのがいいのではないかと思う。例えば札幌でやる場合にも、地図を作るときに歩行者移動支援の測量もし、同時にビーコンの設置もやってしまうと、ものすごく効率的にできるのではないか。現地について測量する回数はなるべく一回ですませることを検討し、作業をインテグレートできるとコスト削減につながると思う。

(5) 議事 (5)

資料9の説明後、出席者より以下の発言があった。

<来年度の事業イメージ>

- ・ おそらくこういうことは、みんな同じような方向で動いていて、多少方式の違いはあってもだんだん収束していく動きがあるということがみえるということが、すごく大切と思う。例えば、交通事業者に対し、そこが持っている大きな駅に展開するとしたら、もうこれぐらい陣地をとれますといった見せ方のようなものができるといい。そういう社会的なムーブメントの作り方は、今後プロジェクト全体の成果を発信したり、来年度以降どこをやろうか検討する際に考えていくといいのではないかと思う。
- ・ この事業でやれることは限られていて、そこだけ見ているとごく一部であるいはバラバラにやって

いるというのが見えるのがどのプロジェクトにとっても非常にマイナスだと思う。これらが連携しつつちゃんと進んでいるという大きなマップのようなイメージでやっていただくと勢いがつく気がする。

- ・ やはり、施設管理者等にとっては、どのような人がどこから来て動いているかという情報は、災害時も平常時も非常に関心が高いと思う。そうすると、先ほどのご指摘のようにカメラも議論されているが、ある種公益的に使うためにデータをどうハンドリングしたらいいかというのは、かなり努力されているグループもいる。彼らの知見もうまく活かしながら、人流の話をする、広まりやすい気がする。
- ・ アメリカのリーバイス・スタジアムでは空間データが全て整備されており、リーバイス・スタジアムアプリというものをダウンロードすれば多様なサービスを受けられる。そのアプリで、座席のランクアップもできるし、自分の座席までビールも一杯から届けてくれるサービスを提供している。そうしたサービスが今回のプロジェクトの延長でできるのかというのが、先ほどの成果報告を聞いて思ったところ。そこが競争領域であれば、どこまでを線引きすれば民間事業者は良いのか詰める必要があるところだと思う。2019年をまずは目途に、そこで何を見せればいいのかというのをもう一回考えてみるというのかなと思う。

以上